子平の歴史

『三命通會』という子平（四柱推命）の書がある。著者は明朝の官吏であった萬民英という人物である。その書によると、戦国時代（紀元前三世紀頃）、蘭台御史という高い地位にあった珞祿子の著作とされている『三命消息賦』が、子平に関する最古の文献と言われている。『三命消息賦』は、徐子平の註釈本という形で現在も入手することができるが、『三命消息賦』自体は、後の時代の何者かによる偽作というのが通説で、その正確な成立年代は不明である。

中国においては、長い間、著作権という考えが希薄だったようで、歴史に名をとどめている人物の名前を拝借して出された書物が多く見られる。例えば、『孔子家語』は孔子の著作ではないし、『算命術』という占いの書は鬼谷子という戦国時代の思想家の著作と言われているが、内容か

らして実に怪しげであるし、後述する『滴天髄』が、明代初期に、伯劉基（伯は一芸に秀でた人に付ける敬称。劉伯温と同一人物）という大臣によって著されたとされていることさえ疑問があるのである。だから、『三命消息賦』が珞祿子の著作といわれていることも、珞祿子が著名人であっただけに疑ってかからなければならないのである。

結局のところ、子平の起源については、『三命消息賦』の註釈本より遡って追究する手だてはないことになる。

子平は、四柱推命の中国での通称であるが、徐居易という人物が字がもとになっていると言われている。徐居易は、五代、つまり、十世紀頃の人物なので、『三命消息賦』の註釈本が著されてから、少なくとも千年ほど経過していることになる。よく「中国四千年の歴史」とか「五千年の歴史」という言葉を子平の枕詞のように使っているのを見かけるが、考証的にはちょっと軽率と言わざるを得ないのである。

なお、徐子平こと徐居易なる人物の素性について、次のような一文がある。

《子平の姓は徐、名は居易。子平はその字名である。東

海の人で、別に沙滌先生と号し、また蓬莱叟とも称した。

子平の方法は、人の生まれたところの年月日時をもって禄命を推すもので、中らないものはなかった。》

子平にはもともと、水面のように平らで調和がとれているという意があって、命理・命学ともいわれる子平において、調和を尊ぶという考えに通じる点がある。徐居易は、そのことを意識して字としたのではないかと思われる。いずれにせよ、彼が命理・命学を飛躍的に発展させたことは事実のようである。ちなみに、字とは、男子が成人後に付ける姓名とは別の呼び名のことである。

現存する子平の書の中で内容的に最も充実しているのは、十四世紀頃、明の時代に著された『滴天髄』である。この書により、六百年ほど前には、子平は人の命運を云々する方法として体系的に確立していたことを知ることができる。そしてその後、陳素庵、任鐵樵、袁樹珊、徐樂吾といった、政治家、官僚であった人が『滴天髄』の註釈本を出版しているが（袁樹珊のみ官僚ではない）、『滴天髄』に言われていることに追随するのみで終わっている。

その明の時代の末頃（十六世紀末頃）に成立した小説

『金瓶梅』には、呉神仙という名の子平に通じた人物が登場し、主人公である西門慶の運勢を占うくだりが見られる。このことからして、三百年から四百年前には、子平は運命学として広く一般に知れわたっていたことがうかがえる。

また、子平の根本理論である陰陽五行論に関する最古の文献は、戦国時代末期頃（紀元前二世紀）成立したとされる『書経』（『尚書』とも言う）の「洪範篇」であるが、紀元前十一世紀前に栄えた殷（商とも言う）の遺跡から発掘された甲骨文中にも断片的な記述を見ることができ、その起源はさらに千年ほど時代を遡らなくてはならないことになる。つまり、今から三千年ほど前ということになるが、陰陽五行論が現在のような形になったのは、儒教の教典である四書五経が成立した戦国時代以降と考えるのが妥当なようである。

また、陰陽論と五行論は元々は別のものであったが、紀元前二百五十年頃、戦国時代に陰陽家から出た鄒衍が陰陽五行論として体系化したとされている。残念ながら鄒衍の著作は現在に伝わっておらず、その思想は、『呂氏春秋』『史記』『漢書』等に残された逸文より推察するしかない。

子平が日本に伝来したのは、文政元年（一八一八年）、江戸時代後期のことである。櫻田虎門（さくらだこもん）という人物が徐大升（じょだいしょう）の著作とされている『淵海子平（えんかいしへい）』（十三世紀後期に成立）を翻訳して出刊したのが、日本における子平の歴史の始まりとなった。しかし、『淵海子平』はあまり良い書物とは言えないものであるため、日本における、その後の子平の発展に悪影響を及ぼした点もあると言える。

最終更新
2000・1・16

「子平の歴史」